

湯浅の方言談話研究

柏 原 卓

Suguru KASHIWABARA

2006年10月11日受理

1. はじめに

この論文では、一人の高齢者による昔の生活の思い出話の談話資料を用いて、和歌山県有田郡湯浅町の方言を、主として音韻、文法の面から研究し位置づける。

湯浅町を含めて有田地方の方言を掘り下げて研究した論考は管見にして知らない（インターネットに語彙集の力作が公開されているが）。1980年代半ば文化庁補助事業の方言緊急調査においても有田地方は調査5地点に選ばれていなかった。わたしは有田地方の言葉についてよく知らずにきたが、2006年「和歌山大学教員メッセ」で栩野ハル子さん親子に面識を得てから、思い出話の録音テープをいただいたり、湯浅の地域FM局マザーシップの「ゆわさ弁講座」に共同出演するなど、研究の機会に恵まれた。本稿は、テープの話から3編を選んで文字化し、湯浅弁の音韻、文法を研究する。そして和歌山県方言における湯浅方言の位置を考察する。

かつて村内英一氏は県内の方言を大別して、紀北と紀南の中間に動詞二段活用残存を指標として紀中を立てて南北に三分するとともに、存在動詞「おる」を使う山地と「ある」「いる」を使う平地とに二分して、六区分とした（村内1962・1982）^(註1)。

じつは村内（1962）と村内（1982）では区分名称や線引きにかなり差異がある。前者では、南北三分の「北部」を「伊都」「那賀」「和市（海草も）」とするものの山地平地を分けず、「中部」と「南部」は平地山地の区分はあるが所属町村は（…など）として省略が有る。

後者になると、「紀北」の「和市」「那賀」「伊都」それぞれに「奥地」所属の町村（必要に応じて地区）を明記するし、「紀中」を「紀中平地」「紀中奥地」に「紀南」を「西牟婁」「東牟婁」に分けてそれぞれ所属の町村（地区）を列挙する。有田市、湯浅町、吉備町、広川町が「紀中平地」に明記され、田辺市は「中部平地」から「紀南」「西牟婁」の「西牟婁平地」に移された。

その区分では有田地方は紀中平地に属するが、私見では日高地方の御坊市の言葉とはかなり差異を感じ、むしろ紀北平地につながる面を感じる。もちろん和歌山市・那賀地方と海草地方と有田地方とでも少しづつ差がある。全般的な解明は今後の課題として本稿では、

紀北平地から日高にかけての異同の一端なりとも解明すべく心がけることにする。

1-1. 地点の概要

和歌山県有田郡湯浅町は1896年（明治29）湯浅村が町制施行、1956年（昭和31）田栖川村と合併。面積20.8平方km、人口15,410人（平成12年）。県北西部、有田郡の西端に位置し、東は吉備町・金屋町、南は広川町、北は有田市に接し、西は湯浅湾に接している。有田川流域とは丘陵で隔てられ、山田川流域・広川河口の沖積平地を主とする地区と湯浅湾沿いの栖原地区・田地区を含む。中央部を南北にJR紀勢本線・国道42号、海岸部を主要地方道が走り、JR湯浅駅がある。海岸部は西有田県立自然公園に指定されている。古くは熊野街道の要地で、湯浅党の本拠、江戸期には和歌山藩の保護する醤油などの商業地として栄えた。現在も有田郡官公署の中心地。

1-2. 話者（敬称略、以下同）

栩野ハル子（とちの・はるこ）：1922年（大正11）3月10日、湯浅町湯浅に生まれる。父（婿養子）を早くなくし、回船の家業を守る母のもとで育ち、多くの話を聞く。夫の父の呉服商を継ぐため日高地方の御坊市に転居、現在に至る。御坊市での生活が長いが、湯浅弁を保持してきた。ただし、テープ録音の語り、FM放送番組での会話は、同年輩どうしの方言会話よりは方言が控えめになるとの本人談である。

栩野清貴（とちの・きよたか）：1950年（昭和25）、湯浅町に生まれる。ハル子の子息。大学生時代に各地の民話採集を経験した。

2. 談話資料

考察に先立って、談話の文字化資料と共通語訳と若干の注を示す。「中将姫」1～2、「千田祭」1～4、「地獄極楽の絵」1～3、の三話である。途中の区切りは便宜的である。

- ・録音は2006年7月14日である。
- ・語り手栩野ハル子の談話の冒頭に「A」と記し、聞き手栩野清貴の相槌などを（）内に「B」と記して入れた。
- ・間投詞や言いよどみなども記したが、言い直しを

「×」で省略した部分もある。

A 語り手：栩野ハル子（大正11年生）

B 聞き手：栩野清貴（昭和25年生）

【中将姫1】

A アノー チュージョーヒメサンテネー × ア
ノ ムカシ × ダレカナ アノ フジワラノ ナン
チューカナ (B ウン) アノ トヨナリキョー
チュンカ (B ウン) ネー ソノ ママゴダッタヨ
ネ アレネ。ホンデニ アノヒト ステラレルンヤ
ネ アレネ デ ヒバリヤマ。デ アノ ナント
イッショヤノネ アノ ヤマトノ タイマサン タイ
マデラトネ。ソイデ トクショジテ イトガニモ
トクショジテ アッテ ソノ トクショジノ ウシロ
ガワニ ヤッパ イマデモ アノ ヒバリヤマテ ア
ンノヨネ。ホイデネ ゴガツノ ジューサンニチノ
ヒニネ ブタイ アノ アソコノ ケイダイニネ ブ
タイ コシラエテネ ソコエネ ニジューゴボサツ
チャント ホンマニ コー アーユー メントカ ソ
ンナノ ボサツノ カッコニ ナルンヨネ。ホテ
チュージョーヒメサンガ ムラサキノ アーユー ソ
ノ コロモネ (B ウン) アーユーノ キテネ ホ
テ コシー ノッテネ ソノ ブタイオネ マワルン
ヤデネ。

(共通語訳)

A アノー 中将姫さんってね アノ 昔 誰かな
アノ 藤原の 何と言うかな (B うん) アノ 豊
成卿と言うのか (B うん) ねえ その 継子だっ
たよね あれね。それであの人捨てられるんだね、あ
れね、で雲雀山。で、アノ何と一緒にのね、アノ大和
の当麻さん、当麻寺とね。それで得生寺って、糸我に
も得生寺というのが有って、その得生寺の後側にやは
り今でもアノ雲雀山というのが有るのよ。それでね
五月の十三日にね舞台、アノあそこの境内にね舞台を
こしらえてね、そこにね二十五菩薩、ちゃんと本当に
あんな面とか、そんな菩薩の恰好になるのよ。そし
て中将姫さんが紫のあんな衣ね (B うん) あん
なのを着てね、そして輿に乗ってね、舞台をね 回る
んだよね。

(語注)

・チュージョーヒメサン：中将姫。天平19年(747)、
時の右大臣藤原豊成の娘として生まれた姫は、13歳
のとき、継母のねたみを受け3年の間雲雀山に隠れ
住んだ。その時、姫を討つように命じられた伊藤春
時は、かえって姫の人柄にうたれ、妻と共に姫に仕
え、真砂寺で剃髪し、法名を得生、妻は妙生と名づ
けこの地に庵を結び安養庵と称し、後に一寺を建て、
春時の法名にちなんで得生寺と号した。その後、姫
は15歳の春、熊野詣の帰りに雲雀山へ狩りにきた父
と再会し都に戻り、17歳のとき、当麻寺で出家し宝

亀6年(775)29歳でその短い生涯を閉じた。

- ・ママゴ：「継子」の「子」を「ママゴ」と濁音で言っ
ている。
- ・イトガ：「糸我」。和歌山県有田市にある地名。
- ・トクショジ：「得生寺」。「ショー」を短呼して「ショ」。
雲雀山得生寺は有田市糸我町中番字蓮坪にある。寺
の由来については、前述「中将姫」の項を参照。
- ・ソんなノ：連体詞。「そんな」だけで良いのに準体助
詞「の」を重複させて成立した。

【中将姫2】

A ソイデネー 「× ヨメミ ショーナラ イトガ
ノ エシキ。ソレデ アワネバ チダマツリ」 テ
ユーネ テ ソンナケ ヒトガ × ヨルカラ ネ
ヨメサン ミルンヤッダラ × コノ ヨメサン ホ
シナー トモテネー ヨメサン × ヨメサン ヨル
ンヤッダラ ナ イトガノエシキカ ソレカ ソノ
ジューガツノネ チダマツリカデ ヨメサンオネ
エー ムスメサンオ ミヨテ ユーコトダツノ。
ホイデネ ムスメサンガネ ゴガツノ チュージョー
ヒメサンノ エシキノ トキワネ ヨーケ ヒト ホ
ンマ ヨーケ ヒトダカリ アンノネ。(B テラ
ワ セマイヤロ。テラワ ソンナニ ヒロナイヤ
ロ) × ヒロナイケド ムカシワ イッパイヤッテ
ンデ。ホイデネ アノ ソラ ムカシワ ナンドゴ
トヤ ナケリヤ ソンナ アソビニ デーヘンモン
ヨー。(B ウンウン)

(共通語訳)

A それでね「嫁見しようというなら糸我の会式。そ
れで会わねば千田祭」と言うね、それだけ人が寄り集
まるからね、嫁さんを見るのだったら、嫁さんがほし
いなと思ってね、嫁さんを選んだったらね、糸我の
会式か、それとも十月の千田祭かで嫁さんをね、良い
娘さんを見なさいと言うことだったの。それでね娘さ
んがね、五月の中将姫さんの会式の時はね、たくさん
の人、本当にたくさんの人だからあるのね。(B
寺はせまいだろう。寺はそんなに広くないだろう) 広
くないけど昔は一杯だったんだよ。それでねソリヤー
昔は何事かでなければ、そんなに遊びに出ないものね。
(B うんうん)

(語注)

- ・ヨメミ：「嫁見」。お嫁さんの候補を選ぼうとして多
くの娘を見ること。
- ・イトガノエシキ：糸我の得生寺の会式。毎年5月14
日、中将姫の命日にちなんで二十五菩薩練供養会式
が行われる。姫のように聡明な徳を得ようと、女兒
が二十五菩薩に扮して開山堂から本堂までかけた橋
を渡る。
- ・チダマツリ：次項「千田祭1」の注を参照。
- ・ヨル：選る、選ぶ。「ヨメサン ミル(嫁さんを見る)」
の言い換え説明として使用している。

- ・ヨーケ：「たくさん」。字音語「余計（ヨケイ）」から。
- ・ナンドゴト：何事。「ナンド」は「ナニゾ（何ぞ）」の「ニ」撥音化と、助詞「ゾ」のダ行への子音交替で出来た語。ザ行からダ行への交替は和歌山各地で多く見られる。

【千田祭1】

A チダマツリ ッタラネ ジューガツノネー
 ジューサン ジューシ ヤンノネ。 ホイデ アソコ
 ワネー ゴサイジンワ スサノノミコトヤノ。 ア
 ラガミサンヤネ。 チー ミヤナ オサマラン
 チューンヨ アソコ。 デ アソコノ カケダイナ
 アラ、カケダイテ ユーナ アノ ネ タイネ ア
 ノ ハマエ イテ ホイデ ゴキトーヒテ ソノ ネ
 ニ イッペンネ ゴサイジンオ ハマエ リョコー
 シテ モラウンヤネ、 ソデ ソノトキニ ソコデネ
 オソナエスルノヤ オサケカラ イロイロネ。 ソヤ
 ケド ソノネー オチダサンガ アラクタ…、 アソ
 コワ ケンシャヤサケネ オキカッテナ イマデモ
 オキケドナ、 ソシタラネ ソコノネ カケダイガ
 ヒロタラネー ウロコ イチマイデモネ ヒロタラネ
 リョー サイテクレルテ ソーラ。 ソヤケニ ソッ
 レコソ ホンマニ モー、 ミナネ ホイデネ フネ
 デ イテンネ クンデネ。 テ アノ ヒロタラ
 チャーッ チャッチャッチャット ツギツギトネ ワタ
 … ワタシナガラ フネー ノッテ フネデ
 チャーット ニゲルノヨ。 ソンナンヤッタヨ。

(共通語訳)

A 千田祭と言ったらね十月の十三、十四するのね。
 それで、あそこはね御祭神は素盞鳴尊だね。荒い神様
 だね。血を見ないと治まらぬと言ふんだよ、あそこ
 は。で、あそこの懸け鯛ねあれは、懸け鯛と言ふのは
 鯛をね浜へ行ってご祈禱して、年に一回御祭神を浜に
 旅行してもらうんだね、その時にそこでお供えするの
 だ、お酒とかいろいろね。だけどその「お千田さん(千
 田神社)」が、あそこは県社だからね大きかったのね、
 今でも大きいけどね、そしたらそこの懸け鯛が、拾っ
 たらね、鱗一枚でも拾ったらね漁をさせてくれると言
 うことでそれは(たいへんな評判だった)。だからそれ
 こそ本当にもう、皆それでね船で行ったんだね、組ん
 でね。そして拾ったらさっさと次々に渡しながら船
 に乗ってさーっと逃げるのよ。そんな風だったよ。

(語注)

- ・チダマツリ：千田祭。毎年10月14日に須佐神社(有
 田市千田1641)で行なわれる祭。海岸までの神輿渡
 御、大漁をもたらす鯛を奪い合う「鯛投げ」などが
 ある。喧嘩祭と呼ばれる勇壮な祭で、「嫁を取るなら
 糸我の会式、婿を取るなら千田祭」とも言い伝えら
 れている。
- ・カケダイ：懸け鯛。神前に供えられた鯛を浜で投げ

て取り合う「鯛投げ」の鯛。大漁をもたらすとされ
 ている。

- ・オチダサン：須佐神社。いろいろな物の名に「オ～サ
 ン」を付けて「お豆さん」などと言うのが近畿方言
 の特徴だが、これは千田にある須佐神社を「オチダ
 サン」と呼ぶもの。
- ・リョー サイテクレルテ：「漁をさせてくれると(大
 漁をもたらしてくれると)」。

【千田祭2】

A デ ワタシ イッペンネ 「ハルチャン マイラ
 ンカイ」テ サソテクレテネ、 「チダマツリテ ア
 ムナ × ナイ」テ ユータラ、 オカーサング 「ア
 ムナナイカ」テ ユータラ 「イヤ アムナイ トカ
 ミヤナンドラ エー、 マイルダケ マイッテ カ
 エッタラ エーンヤショ」テ ユーテネ。 「ホナ
 イッペ ハナシノ タネニ イッペ ツレットテ モラ
 オ」テ イタンヨネ。(B アルイテ イタンカイ。)
 イヤイヤ フネデヨ。(B ユアサカラ フネデ)
 「フネ ダスサケ フネ ノッテ イキナヨ」テ ユ
 テネー ホテ フネ ノセテモロタンヨ。 ホイテ
 アノ イロイロト ギョーシ アルサケ ソレマーナ
 オチダサンエ… オチダサンノ ケイダイデ イロイ
 ロ ギョーシ アンノ ソレオ オガンデ キタンヨ
 ネ。 ホイタラネー アソコワ ダイブ タカインネ。
 テ × ソノ オミコッサン シタエ オロシテ ク
 ンノヨネ ハマエ オウツシスルサケネ。 オマツリ
 スル トキネ。 ホタラネ マンナカワ マンナカニ
 チョット ヒロイ トコ アンノネ ソコマデ モー
 ネ オミコッサン モー オロシターッテン。 ソノ
 ウエーネ オトコノヒトネー オミコッサンノ ミコ
 シノ ヤネー マタガッテネー サケ ノンジャウサ
 ケヨー、 テ 「ウニャウニャウニャ」テ ユーターッ
 タン。

(共通語訳)

A それで私一度ね「はるちゃん、お参りしないか」
 と誘ってくれてね、「千田祭って危なくない?」と言
 ったら、お母さんが「危なくないか」と言ったら、「いや、
 危ない所は見なかったら良い。参るだけ参って帰った
 ら良いじゃないか」と言ってね。「それなら一度話の種
 に一度連れて行ってもらおう」と行ったんだよね。
 (B 歩いて行ったの?) いやいや船でだよ。(B
 湯浅から船で) 「船を出すから船に乗って行きなさい
 よ」と言ってね、そして船に乗せてもらったんだよ。
 そして色々と行事があるから、それをまあね千田神社
 の境内でいろいろ行事があるのをそれを拝んで来たの
 よね。そしたらね、あそこはだいたい高いのね。そして
 御神輿を下に下ろして来るのよね、浜にお移りするから
 ね。お祭りする時ね。そしたらね真ん中は、真ん中
 にちょっと広い所があるのね、そこまでもう御神輿を
 もう下ろしてあったんだ。その上にね、男の人が御神

輿の屋根にまたがってね、お酒をのんでいるんだから、そして「ウニャウニャウニャ」と言っていたの。

【千田祭3】

A ソコエネー ワリキ モッタ ヒト キテネー 「コノ ミコシ マダ ゴキトーシテナイ」チュテ ユーテネ。 マ ゴキトー シテナイ モン オロシ ターッテント。 コノ… ホテ モー ナカニ ゴサイ ジンガ アンノヤデ ソイニサー ソノ ミコシオ ネー ヤネー マタゴシテネー 「ウニャウニャ」テ ユチャーッテン。 ホタナー 「コノ オミコシ マダ ゴキトーシテナイ」チュテ ソノネー ワリキデ ドント アタマ タタイテンショ。 ホイタラ アタ マヤロー セヤカラ チーガ デテネー ホイタラ ソノ イッショニ イッテタ クミノ ヒトガ アン ノヤネ ソノ ホシタラ ナグラレタ クミノ ヒト ガ ナグッタ クミオ ソーレコソ オワエテ イテ ネー オーゲンカニ ナッテネー。 ケンカテナ カンケイ ナケリヤ オキーホド オモシャイテ ユー ケドネ コワカッタ ソノトキ。 (B ウンウン) ホタラモー ソンナ ヒテル アイダニ モー アッ タケド ホッテンショー。 ホテネー 「ハルチャン イヌンヤデー」テユテ シライテクレテネ ホシテネ フネデネ カエッテキタ。

(共通語訳)

A そこにねえ、棒切れを持った人が来てね「この神輿はまだ御祈祷してない」と言ってね。まあ御祈祷してないものを下ろしてあったんだそう。この…それでもう中には御祭神がいるのだよ、それなのにね神輿を屋根を跨いでね「うにゃうにゃ」と言っていたの。そしたらね「この御神輿はまだ御祈祷してない」と言って、その棒切れでがっつんと頭を叩いたのだよ。そしたら頭だろう、だから血が出てね、そしたら、その一緒に行っていた組の人がいるんだね、そしたら殴られた組の人が殴った組をそれこそ追いかけて行ってね、大喧嘩になってね。喧嘩ってね関係なければ大きいほど面白いと言うけどね、恐かった、その時。(B うんうん) そしたらもう、そうしている間にもう有ったけど捨てたんだよ。そしてね、「はるちゃん、帰るよお」と言って知らせてくれてね、そして船で帰って来た。

(語注)

- ・ワリキ：棒切れ。もともと「割り木」は太めの木を割った燃料の薪を言う。
- ・オワエテ：追いかけて。「オワエル」は「追う、追いかける」。

【地獄極楽の絵1】

A 「ハルコー、 マタネー シンセンジニ ジゴク ゴクラクノ エー ミニイコカ。」ッテ、「マイトシ マイトシ アンナモン ミタナイワ モー。アンナ モージャノ ヤセコケタノ アンナノヨー オトロシワ。」テユタラ、「オトロシタテ マー ホイデモネ ミ

トキヨシ。ナ コノヨデ イテル… コノヨニネ ワルイ コト ヒタラ アンナイ ナンノヤデ ッテ ユーネ、ソーユー イマシメノネ エヤサケ ミトキヨシ。」テ。イキタナイノニ ソイニ オカサンニ ツレラエテ イクノネ。テユーコトワ カエリニ チョット ナンド コーテ クレルサケネ ソレオメアテニ ツイテ イテ オカサンニナ。ソイタラ ナー オーキナネー × オーキナ アノ カケジク アンノネ。チノイケジゴクトカ × ウソ ユータラネー オーキナ ヤットコデネ シタ ヌカレタルトコ アンノ。ヒヤー ホデ ソレ ミテネー (マタ ミニキタケド モー ミタナイヨ) トモテメー ツブッテルンヤケドモ (ミヤントコ) トモテモ ヤッパ (キタンヤハケ モット ミヨカナ) トモテ オカーサンノ ウシロ カクレテ チョット ノゾクンネ。ホッテネー オーキナ ヤットコデネー ヒタ ヌイターンノネ。ソイデ アノー ハリノヤマエネ ハリ イッパイ、ハリセンボンテ ユーケド ホンマニ ハリ イッパイ、ハリノ ヌアッテルトコロエ ソノネ ソノ ヤマエ ノボッテイクノネ。テ チノイケジゴクテ ソノ マッカナ チノ ウミノ ナカオ オヨイデル トコ アンノネ。ソーユー ヨーナネー ジゴク… 「ネ ハルコ ヨー ミトキナヨ。ナ アンナニネ ウソ ユータリネ ワルイコト ヒタラ アンナイネ アノヨエ イテカラ アンナニ ジゴクエ アノ オトサレテ アンナ セイカツ スンノヤデ。オトロシカロヨ。ホヤケネ アンバイ クラヒトカナ アカンノ。オカサンノ ユーコト、オヤノ ユー コトモ ヨー キーテ、キョーダイゲンカ セント、トモダチトモ アンバイ アソデネ、カシコー ヒテヤナングラ シングラ アンナ メニ アウンヤデ。」 ソノ マー ハナシネ ヒャクマンベンホド キータ。マイートシ モー ボンニ ナツタラ オカーサン ツレテイクノヨネ。ホイテ ソレオネ ユーテ キカスンネ マイトシ。ソイデ ヒトシキリ ソンナ ヒテネ ハナシ キーテマイッタネ。

(共通語訳)

A 「ハル子、また深専寺に地獄極楽の絵を見に行こうか。」と。「毎年毎年あんな物を見たくないよまったく。あんな亡者の瘦せこけたの、あんなの怖いよ。」と言うと、「怖いと言ったって、まあそれでもね、見ておきなさい。ね、この世にいる…この世で悪い事したらあのようなのだよと言う、そう言う戒めの絵だから見ておきなさい。」と。行きたくないのにそれなのにお母さんに連れられて行くのよね。と言うのは、帰りにちょっと何か買ってしてくれるからね、それを目当てに付いて行って、お母さんにね。そしたらね大きな掛け軸があるのね。血の池地獄とか、嘘を言ったらね大きなヤットコで舌を抜かれている場面があるの。ひゃ

あ、それでそれを見てね、(また見に来たけど、もう見たくないよ) と思って目をつぶっているんだけど、(見ないでおこう) と思って、やっぱり(来たんだからもっと見ようかな) と思って、お母さんの後ろに隠れてちょっと覗くのね。そしてね大きなヤットコでね舌を抜いているのね。そしてアノ針の山へね針がいっぱい、「針千本」と言うけど本当に針がいっぱい、針の刺さっている所に、その山に登って行くのね。そして血の池地獄といって真っ赤な血の海の中を泳いでいる場面があるのね。そういうような地獄…。「ね、ハル子よく見ておきなさいよ。ね、あのようにね、嘘を言ったり悪いことをしたらあのようにね、あの世へ行ってからあんなに地獄へ落とされてあんな生活をするのだよ。恐ろしいだろう? だからねちゃんと暮らしておかなければいけないの。お母さんの言うこと、親の言うことも良く聞いて、兄弟喧嘩しないで、友だちともちゃんと遊んでね、賢くしていなければ、死んだらあんな目にあうんだよ。」その話をね百万遍ほど聞いた。毎一年、盆になったらお母さんが連れて行くのよ。そしてそれをね言ってお聞かせるのよ、毎年。それで一頻りそんなふうにしてね話を聞いてお参りしたね。

(語注)

- ・シンセンジ：深専寺。有田郡湯浅町大字湯浅785にある浄土宗の寺。法皇、上皇の熊野行幸には宿所となった。県指定文化財の本堂は江戸時代の寛文三年(1663)再興。門前に安政元年(1854)の地震津波の教訓を記した「大地震津波心得の記」石碑がある。
- ・ヌアッテル：刺さっている。「ヌアル」は「刺さる」意味で、「トゲが刺さる」を「モノ ヌアル」と言う。

【地獄極楽の絵2】

A ンデ アノー ソイデモネー ユカタ キセテモロテネー。 デ ワタシ… アノ コドモノ ジウチューノワ セー タカ ナンノ ハヤイカラネ ホイデネ モー ボンマエニ 「ホタソー キモノノネー アノナント ミアゲ マタ オロシトカナンダラ アカンデ。ハヨ イッペ キテミナ。」ツテユーノ。 ソノ ミアゲ オロヒテ モラウノガネー ヒテモラウノガ ウルサイネ ワタシ。イチイチ オカーサンユーノガネー。セヤケドネ 「サ ハヨ イッペ キテミナ。」ツテ ユテネ ソデ アノ キョネンノ フクドーシテモ セー アノ ノビテルカラ ホデミアゲオネ アノ ナオシテモラウ。 タ キンジョノ ヒト モー 「ハルチャン モー オカサンニヒテモロタン? 」ツテ、「ワタシトコノ コーニモヒテモータツテ。」ツテユーテ オカーサン ダイブキンジョノ コーニモネー アノ ミアゲ ナオヒテアゲテタケドネ。ソーイテネ ボンノ… ボンノミッカダケノ アイダ ソレ エーノ キセテクレルンヨ バンニ ナツタラ。ソイテネー ハヨ フロ

イッテネー テンカフンオネー クビカラ マッシロケニ ヌツテネー ソイテネー アノ ソノ ユカタキセテクレタンヤデ。

(共通語訳)

A それでアノそれでもね浴衣を着せてもらってね。で、私…、アノ子供の時分というのは背が高くなるのが早いからね、それでもう盆前に「そしたらほら、着物のねアノナニト身上げをまた下ろして置かなければいけないよ。早く一度着てみなさい。」と言うの。その身上げを下ろしてもらうのがね、してもらうのが面倒なんだよ、私。一々お母さんが言うのがね。そうだけどね「さあ早く一度着てみなさい。」と言ってね、それでアノ去年の服はどうしても背がアノ伸びているからそれで身上げをねアノ直してもらおう。そしたら近所の人が「ハルちゃん、もうお母さんにしてもらったの? 」と、「私の家の子供にもしてもらってちょうだい。」と言って、お母さんはかなり近所の子供にもねアノ身上げを直して上げていたけど。そうして盆の…盆の三日だけの間、それを良いのを着せてくれるのよ、晩になったら。そしてね早く風呂に入ってね、天花粉をね首から真っ白に塗ってね、そしてねアノその浴衣を着せてくれたのだよ。

(語注)

- ・ミアゲ：「身上げ」で、着物の肩や腰の縫い上げ。

3. 考察

以上の談話資料から、音韻、文法に関わる特徴的な現象を取り上げて考察しよう。なお、音韻や文法から説ききれない方言語彙のいくつかは、前章の語注に取り上げておいた。

3-1. 音韻の特徴

湯浅ないし有田地方だけの特色と言えるものではないが、関西方言的な特徴を示したり強化している特徴的な点を幾つか上げる。

3-1-1. 母音に見える特徴

(1)長音化(長呼)

音節を少し長く引く関西方言の特徴が「エー(絵を)」「コー(子)」「セー(背が)」「チー(血を)」「チーガ(血が)」に見えた。また、強調の長音化が、「ソーラ(それは)」「ヨーケ(余計→たくさん)」「マイートシ(毎年)、擬態語「チャーット」、終助詞(ないし間投助詞)「デー」「ナー」「ネー」「ヨー」に見られた。

(2)短音化(短呼)

短音化として、形容詞終止形語尾に「オトロシ(恐ろしい)」「ホシ(欲しい)、助動詞「う」でできた長音の短呼に「ヤロ(だろう)」「モラオ(もらおう)」「トモテ(と思うて)」、形容詞ウ音便の短呼に「ヒロナイ(広うない)」「ハヨ(早う)」、動詞ウ音便の短呼に「チュンカ(と言うんか)」「チュテ(と言うて)」「テユテ(と言うて)」、名詞に「トクシヨジ(得生寺)」「カッコ(格

好)」が見られた。

(3)連母音の転化

- ・理由の接続助詞「サケ(ニ)」は、「サカイ(ニ)」が a i 連母音の融合で e 化したもの。
- ・進行態の「チャール」は、「テアル」が e a 連母音の融合で j a : の拗長音に転化したもの。接続詞「セヤカラ」は、「ソヤカラ」が o j a の o j の融合で e に転化したもの。
- ・過去の説明的叙法「テン」は、「タノヤ(たのだ)」の「ノヤ」が o j 融合で e 化した「ネ」が、e で「タ」を「テ」に変えつつ自身は撥音化して「テン」となったもの。

(4)母音脱落

- ・結果態「ターッタ」は「テアッタ」の e 脱落。
- ・「オミコッサン(お神輿さん)」は「シ」の i 脱落で s が残って促音に。

3-1-2. 子音に見える特徴

(1)ザダラ行の転化

和歌山方言を特徴付けるザダラ行にわたる転化は、今回の談話では関係語句がたまたま少なく、ほとんど見られない。「ナンド(何ぞ)」の他、今回割愛した部分の会話引用の中に「クルロー(来るぞ)」「カマンドー(構わんぞ)」くらいのものである。

(2)Sの弱化

s の摩擦が弱く、h に転じたり、s やシ音節が脱落する。「ハケ(さかい→さけ)」「ヒテ(して)」「デーヘン(出はせん)」「ホイトラ(そしたら)」「サイテ(させて→さして)」「シライテ(知らせて)」「ソイテ(そして)」「ホテ(そして)」など。

(3)ラ行の弱化

ラ行は弱く、r 脱落、イ音化、ウ音化、撥音化、音節脱落などが起こる。「ツレラエテ(連れられて)」「ソイデ(それで)」「ホイデ(それで)」「ノンジャウ(飲んである)」「アンノ(有るの)」「クンノ(来るの)」「ヤンノ(やるの)」「ソナケ(それだけ)」「ホナ(それなら)」など。

(4)ワの陰在

係助詞や終助詞の「ワ(は、わ)」の半母音 w 脱落で a が前部に吸収される現象。「ソラ←ソレワ(それは)」「ユーナ←ユーノワ(言うのは)」「トカ←トコワ(所は)」など。また終助詞的連語の「体言ヤイショ←体言ヤイショ(わ-してよ)」もある。今回紹介していない談話の中に、「呼ばれて行たことアラヨー(有るわよ)」もある。

(5)ヨの陰在

詠嘆終助詞「ヨ」の半母音 j 脱落で o が前部に吸収される。前部は過去の「タ(た)」で「ト(たよ)」になる。談話では割愛した部分に「オワリヤット(終わりだったよ)」。

(6)バの陰在

接続助詞「バ(ば)」の子音 b 脱落で a が前部に吸収される現象。「ナケリヤ←ナケレバ」「ミヤナ←ミヤネバ(見なければ)」。

(7)促音挿入と脱落

村内英一氏は、促音化現象が東京語より少ない関西方言だが和歌山方言には特徴的なものがあるとして例示している(村内1982, p177)。本談話では「ソレッコソ(それこそ)」「ツレット(連れて)」「ヤッパ(やはり)」「ッテ(引用の「と」)」が見られる。「マッカ(真っ赤)」もある。逆の促音脱落では「イテ(行って)」がある。

3-2. 文法の特徴

村内(1962)が和歌山県方言区画の指標とした「二段活用残存(紀中)」「存在オル使用(山地)」は本談話にはどちらも見当たらない。したがって紀中とは区別される紀北の、山地ではなく平地の特徴と認められるから、紀北平地方言として海草地方や和歌山市・那賀地方につながると考えることができるのではないかと。本稿ではそれ以外の事項について検討しよう。

(1)強調のヤショ、ヤイショ

断定助動詞「ヤ」に強調の終助詞「ワイショ・ワショ←ワシテヨ(だよ、じゃないか)」が付いて半母音 w 脱落で「ワ」が陰在し「ヤイショ」「ヤショ」となったもの。談話中に見えるのは次のとおりである。

- ・エーンヤショ(良いのだよ)、ユーンヤショ(言うのだよ)
- ・タタイテンショ(叩いたのだよ)、ホッテンショー(捨てたのだよ)、イテテンショー(いたのだよ)
※「テン←タノヤ(たのだ)」なので「タノヤショ」と解される。
- ・ヤジルンヤイショ(野次るのだよ)、ユーンヤイショ(言うのだよ)

この語法は、和歌山・那賀地方、海草地方で盛んな「ワシテ」類すなわち「無いワシテ、ワヒテ、ワイテ、ワイショ、ワショ、ワッショなど」「有ラ(←有るわ)シテ、ヒテ、イテ、イショ、ッショなど」「ヤ(←やわ)シテ、ヒテ、イテ、イショ、ッショなど」に繋がる(「ヤショ」「ヤイショ」しか見えていないが)。

紀中日高地方に行くと「ヤラ」「ヤラヨ」という紀南タイプの「ワイダ、ワイラ(ワダ、ワラ)」語法になることを考え合せると、この語法については、湯浅は紀北タイプと言って良い。

(2)アスペクトのチャール、タール、テル

各地で「進行態(継続態)」と「結果態(存続態)」を、動詞に「アル・イル・オル」または「テアル・テイル・テオル」を付けて、つまり「テ」の有無で区別するシステムが見られる。本談話ではどうか。次のように進行も結果も「チャール」「タール」「テル」で「アル」「イル」に「テ」が加わったものばかりである。

[進行態] ユチャーッテン(言ってたんだよ) / ヌイ

ターンネ (抜いているのね)、ユターッタン (言っていたの) / ヒテル (している)、イテル (いる)

[結果態] デチャールサケヨ (出てるからね) / オロシターッテン (降ろしてあったのだよ)、オロシターッテント (降ろしてあったんだって)、カエッタータンヤナ (帰っていたんだな) / ツブッテル (つむっている)、ヌアッテル (刺さっている)、ノビテル (伸びている)、キテル (来ている)

この語法について村内 (1982) は、地域別の分布を述べて

①継続態—(中略) 有田郡以南の紀南地方は「降りヤル」が最も多くて、「降ッチャール・降ッタル・降ッタル・降ッテル・降ラル」などの言い方が続く。

②結果態—(中略) 有田郡では「降ッチャール・降ッテアル、降ッチャル」が多く、日高郡以南は「降ッタル」が断然多く、「降ットル・降ッタル」などが散在する。

としている。しかし本談話では、継続態 (進行態) において「ヤル」が出現せず、結果態において「テル」が「タール」に拮抗している点が異なる。ちなみに引用省略した部分で和歌山・海草・那賀は、継続態 (進行態) 「降ッテル」、結果態「降ッチャール」が多いとしている。この語法において、本談話から見た湯浅は紀南タイプよりは紀北タイプに近く感じられるが、一致してもいない。さらに用例数を増やして慎重に考察すべきである。

(3)原因・理由のサケ、ケ、カラ

・原因・理由の「サカイニ」類は次のようである。
 シューセンゴヤサケニ (だから)、ダスサケ (出すから)、ヤサケ (だから)、オウツシスルサケネ (お移しするからね)、ヤサケネ・ヤサケナー (だからね)、デチャールサケヨ (出てるからね)、ノンジャウサケヨ (飲んでるからね)、キタンヤハケ (来たのだから)、ソヤケニ (そうだから)、ホヤケネ (だからね)

・「カラ」は次の例がある。
 ヨルカラ (寄るから)、セヤカラ (そうだから)、ハヤイカラネ (早いからね)、ノビテルカラ (伸びてるから)

現今はどこでも高齢者までが「から」を使うことは珍しくない。むしろ和歌山市辺りの人々から見て、「サカイ」を「サケ」に言う点が海草や有田の言葉の特徴とされるのを裏書しており、例が多数あることが注目される。『和歌山県方言』には海草、有田とともに日高郡も「サケ」使用としている。

(4)確認の終助詞・間投助詞 ネ、ナ

村内 (1962) は海草郡下津町を例に、「ネー」を「新しい言葉で、女性の使用が多く、上品で多少あらたまつたような感じがある。」また「ナー」を「一番普通に多

くの人に使われ、対等、敬意なく、やや感嘆的である。土着の言葉。」と説明している。談話に現われたのは次のようである。録音していない会話で「アントラ アリダノ ヒトヤノ (あなたたち有田の人だね?)」も聞いている。村内 (1962) は「ノー」を「(前略) 親しみの感じ強く、共感共鳴を期待している感じである。」としている。

・ネー・ネ: 「中将姫さんてネー」「アレネ」など約140例。

・ナー、ナ: 「ホシナー (欲しいな)」「ダレカナ (誰かな)」など9例。

村内氏は、上品で多少あらたまつた「ネー」を「新しい言葉」と言い、「ナー」は「土着の言葉」と言っているので、外部から「ネー」を導入したことを言外に表現している。

(5)断定助動詞や、ダ

本談話では断定助動詞は原則として西日本式の「ヤ」で、過去助動詞「タ」が付く時だけ例外的に東日本式の「ダ」が2例だけ「ダッタ」の形で現われる。

・ダッタヨネ (だったよね)、テ ユーコトダッタノ (と云うことだったの)

・スルノヤ (するのだ)、ヤノ (だね)、ヤネ (だね)、ヤナー (だなあ)、ンヤネ (のだね)、ヤノネ (なのね)、ヤテ (だと、だって)、ヤサケニ・ヤケニ (だから)、ソヤケド・セヤケド (そうだけど)、ンヤデネ (のだよ)、ンヤデー (のだよ)、ヤッテンデ (だったのだよ)、ンヤッタラ (のだったら)、セマイヤロ (狭いだろう)

助動詞「タ」が少し変化したものに接続する時は「ヤッテンデ」「ヤット」「ンヤッタラ」であり、「タ」のままなら「ダッタ」という解釈もできそうだが、なお用例を増やして考察すべきである。他地域で「デアッテ」を耳にしたが、「であって」「であった」は「ジャ」への音変化が遅れたのかも知れない。

3-3. 考察のまとめ

(1)終助詞・間投助詞「ネ」を多用するなど、多少あらたまつた口調であり、本人も方言ひかえめと証言しているが、少なくとも音韻、文法面では、湯浅弁の資料として信頼できそうである。

(2)音韻変化には、近畿方言的ないし有田方言的な特徴を生む現象が種々観察できた。しかし、確実なザダラ行の転化がほとんど無い。さらに広く用例を検討すべきであろう。

(3)文法には湯浅弁の位置を考える材料が見られた。

・強調の「ヤショ・ヤイショ」は紀北につながり、紀中紀南の「ワイダ、ワイラ」と対立するので紀北グループに入れる要素の一つになる。

・進行態、結果態の「チャール、タール、テル」は、村内 (1982) の県内分布記述、すなわち紀南の進行「ヤル」結果「タール」、紀北の進行「テル」結果

「チャール」の紀北紀南どちらともズレがあるが、紀南の進行「ヤル」が見えない点を重視すべきか。

- ・原因理由の「サカイ」を「サケ」「ケ」とするのは、紀北の中の南側である海草で、北側の和歌山市、那賀と対立している。この語法でも有田は紀北（の南部）と関係が密なのである。
- ・終助詞・間投助詞「ネ・ネー」は県内地域差よりも、外来の新しい語である点が重要である。
- ・断定助動詞は「ヤ」を基調とする。「グッタ」は何らかの理由で東日本系「ダ」と同じになるが、地域体系内部での考察を試みるべきである。

注

- 1 南北三分には二段活用残存のほかに田辺アクセントも基準としているが、二段活用の方が識別意識を駆りたてるとしている（村内1962、p370）。
日常語の「紀北」は、紀ノ川沿岸地方の伊都郡と那賀郡を指すことが多い。村内英一氏の方言区画における「紀北」「紀中」「紀南」（はじめ「北部」「中部」「南部」）の三分法にしたがえば「紀北」は伊都、那賀、和歌山市、海草である。

文献

- 村内英一1962 「和歌山県方言」（榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂）
- 村内英一1982 「和歌山県の方言」（『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会）
- 和歌山県女子師範学校・県立日方高等女学校『和歌山県方言』1933年
- 『日本方言大辞典』小学館 1989年